

南西諸島におけるウシガエルの導入と分布

嶋津 信彦

しまづ外来魚研究所

ウシガエル *Lithobates catesbeianus* (無尾目 Anura: アカガエル科 Ranidae) は、北米東部を原産とし、食用や害虫・獣の駆除を目的として世界中に導入され、高い捕食性と繁殖力により在来種を圧迫していると考えられている。本研究では、南西諸島における本種の導入・分布記録を 1924-2012 年に発行された文献等から抽出・整理した。また 2015 年 5-10 月に 43 島で現地踏査を行い、目視や鳴き声、トラップによる採集から生息を確認し、定着状況を明らかにした。結果、文献等の記録は、奄美群島 4 島、沖縄諸島 9 島、八重山列島 3 島、大東諸島 2 島の計 18 島から認められた(図 1)。現地調査では、計 5 島から見つかり、新分布は認められなかった。導入経路や時期は、国主導で全国各地に本種が配布された 1920 年代と、久米島における養蛙事業に起因する 1953 年以降の 2 つに大きく分けられた。ウシガエルは、確認された時期や個体数などの文献記録から与路島、沖縄島北・中部、渡嘉敷島、渡名喜島、久米島、石垣島および小浜島における定着が示唆された。しかし、現地調査では、未調査の与路島を除くこれらのうち沖縄島と久米島でのみ生息が認められた。本種は初期に導入された奄美大島や石垣島をはじめ、多くの島で絶滅したか繁殖が困難な状況にあると考えられる。分布縮小は水田からサトウキビ畑への転換による生息環境の喪失や新たに導入されたオオヒキガエルとの競争が原因かもしれない。一方でウシガエルは、記録が不足していた沖永良部島、伊平屋島および伊是名島では現地調査で多数確認され、定着している可能性が高い。

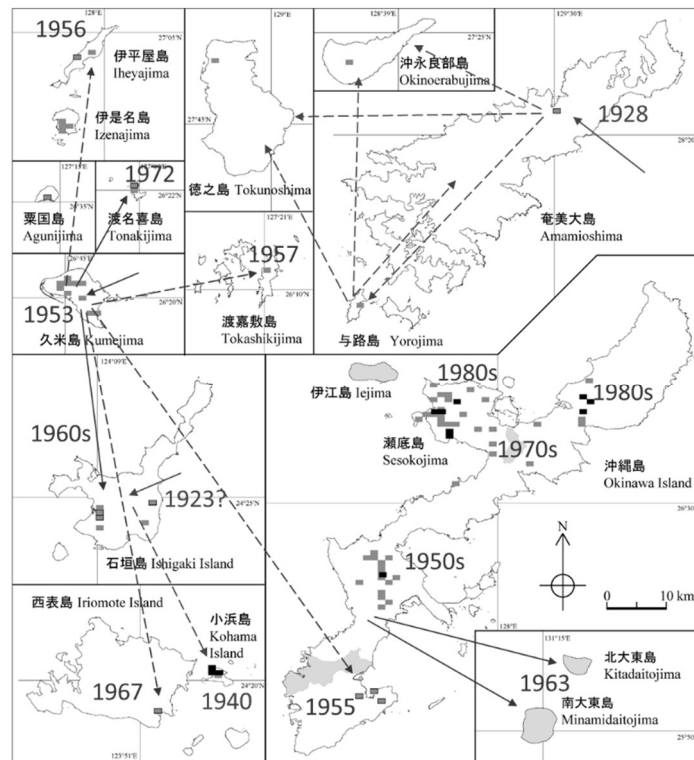


図 1. 南西諸島におけるウシガエルの導入と分布